

新しい新人が弊社に入社した。

いやでも新「人」と呼んでいいのかどうかはわからない。なんせそいつは人工知能を持ったロボットで、人間とは一線を画す存在だからだ。何年も前に弊社のお偉いさんが『人工知能ロボットの雇用化』を打ち立てて以来、職員のロボット比率はとんでもないことになった。基本的な感覚器官が人間と同じであることを前提として、腕が蜘蛛よろしく六本生えているもの、人の気持ちとやらを備えているもの、食べたものをエネルギー変換できるもの、有象無象が働いている。

おそらく新しい奴は、この間開発された最新モデルのうちの一人なのだろう。……「人」？ ああ、もうどうでもいいや。面倒くさい。仕事ができれば人でもそうでなくても、俺は構わない。

夏樹

「新しく入りましたオノダです。よろしくお願いします、先輩」

にこにここと、人好きしそうな笑みを浮かべる、真新しい作業着の青年。軋みもなく差し出される手。

「……はい、よろしく。フジノです」

わざわざ休憩中に声をかけてくんな、と一蹴してやりたかったがそういうわけにもいかない。オノダね、と口の中で反芻して、差し出された手を渋々握る。血液が通っていないからか、皮膚に似たなにかはひやりとしていた。

「手つめたいね」

「そうですね？ 先輩はあったかいですね」

指摘された自分の手に触れてみると、思いのほか熱を持っている。オノダと比べるからか。

「今日からだっけ。仕事慣れそう？」

会話のとっかかりを探そうと、口の端を無理やり緩ま

せて尋ねる。俺の問いに数度瞬きしたオノダは、理解ができないと言いたげに首を傾げていた。

「慣れるも何も、流れを学習するだけなので」

人工知能を持ったロボットを雇用するメリットの一つとして、新人教育の必要が挙げられる。作業内容の取得が著しく速いのだ。少し昔なら『飲み込みが早い』なんて言葉で言い表すのだろうが、今はもはや飲み込みなんてレベルじゃない。学習させてしまえば一発で覚え、削除しない限り忘れることはない。加えて俺とオノダの作業はひたすら同じことを繰り返す反復作業だ。慣れるなんてこと、考える必要すらない。

「さすが最新型ロボットだねえ」

思いがけず後ろ向きな感情が声に混ざる。気づいていないのか、模範解答の笑顔が返ってきた。

「ええ。バッテリー長持ちなんですよ」

スマートフォン宣言文句かよ。充電も短時間で済むんですよ、とオノダがまた笑った。

昔人間を支配していたスマートフォンは、来年あたりには近代史として教科書に名が刻まれるらしい。欠けた赤い実の生みの親は、はたして喜んでいるのだろうか。

なんにせよ、バッテリー長持ちは労働にうってつけた。

「まあ頑張れよ。じゃあ俺、仕事戻るから」

「え？ もうそんな時間ですか？」

作業着の裾を捲って文字盤を見せてやると、オノダもそっくり同じことをしてきた。弊社で支給されている腕時計。安っぽい露店の景品みたいなやつ。まるつきり同じ外見だが、よく見ると俺とオノダの文字盤が一致していなかった。約十五分、俺の方が先を急いでいる。

「あれ？ 悪い。狂ってみたいだわ」

「いえ。まあ機械ですから」

「それを機械が言うかね」

太陽が出勤を知らせて、月が退勤を促す。何日も何ヶ月も何年もそんな生活を続けていると、もはや何も考えなくなっていた。ロールプレイングゲームの主人公ってこんな気持ちなのだろうか。いや村人Aの方が近いかな。

最近俺は感情や脳を動かすことを放棄した。思考なんて持ち出すだけでエネルギーの無駄死に。いくら頭で考えたって机上の空論。どんなに共感したって所詮他人の不幸は一つのエンターテインメントだし、他人の幸福は妬みのコンテンツ。見渡せば仕事を黙々とこなすロボットのみの空間で感情豊かに過ごす余裕も意味もない。省エネ、エコ、時短、そんなものを高らかにうたう社会に適合してやった方ははるかに楽だ。

「どうしたフジノ、顔死んでんぞ」

休憩中長椅子に座り込んでいたら、同期が顔を覗き込んできた。元気な声が脳をガンガン打ち鳴らす。

「大きい声出すなよ、頭に響く……」

「調子悪いのか」

力なく頷くと、視界にはリノリウムの床。

頭部の中で一定間隔の痛みが走っている。ここ最近ずっとそうだ。業務に支障はきたしていないが、集中力が途切れることが増えた。ごくたまに意識も途切れる。

「俺も最近調子悪いけど、まあこんな生活だしな」

そういえば俺以外にも、調子の悪そうなものは何名かいた。こいつを含めた同期も先輩も。おかげで最近はやつれた顔が多くて鏡要らずだ。たぶん部屋の鏡を破壊しても何ら支障がない。

「あとあれだ、季節の変わり目」

「馬鹿、もう今が何日もわかってねえよ」

春夏秋冬の移り変わりなど、とうの昔に感じなくなつた。朝と夜だけわかっていれば、もつとと言うと腕時計の文字盤が読めれば生活できるのだから。

「フジノ、今何時だ？」

腕時計を見つめているくせに、何故聞いてくる。

「あ……俺最近時計進んでんだよな。計算するわ」

「え、フジノも？俺も時計進んじまってさあ。今真夜中」

「やったじゃん、帰れるな」

確か昨日は二十分ほどの進みだった。でも今日の朝は三十分になっていた。今この時計は何分生き急いでいるんだろうか。文字盤はとつとに休憩時間を終了させていた。

「早くて怒られることもないだろうし、もう戻るか」

「社会に貢献してるな、俺たち」

「ほんとにな」

退勤を知らせるベルが咆哮する。今夜も月は出ているだろうか。窓を覗こうとして、思ったよりやつれ果てた自分の顔に驚いた。こんな顔をしていたのかと自分の頬をさするが、ざらついて熱を持っていることしかわからない。

「おう、お疲れさん」

「……先輩、お疲れさまです」

がしゃがしゃ姦しい大量の腕と共に、同じ作業着の男が窓に映った。ふだん俺の後ろのラインで作業している蜘蛛もどき。入社したときにその腕全てが俺と握手を求めてきたものだから、ちよつとした握手会になったことを覚えている。先輩のラインは真つ先に仕事を終えることとで有名だし、俺もそれを尊敬してはいる。いるが、六

本の腕が見事に異なる仕事をやってのける様は、傍から見ていてすこし気味が悪い。

「聞いてくれよ。俺のライン人が減っちゃまってさ」

「へえ」

「なんだよノリ悪いな」

「調子悪いもんで、すいません」

不服そうな顔をしていた先輩が、俺も俺も何本か手を挙げた。挙げる腕は一本でいいだろうに。振り返って先輩の顔を見つめると、いくつかの手のひらが俺の目を覆うように開かれる。またいくつかが、それを退けた。

「まあこんな環境じゃあな、しょうがねえべ」

そう言うてけらけらと白い歯をのぞかせるその男は、いつも通り元気そうに見えた。

「あ、俺急がなきゃならねえんだ。今日ドラマの最終回なんだよ」

「あらら、お疲れさまです」

「間に合うかな。今何時だ？」

先輩がどたばた腕時計をはめた腕を探している様は、さながら千手観音に近しい。時計見してくれ、と腕を掴まれたが、俺の文字盤を覗き込んであからさまに顔が歪んだ。

「んだこれ、何時間進んでんだ？遅れてんのか？」

「もうわかんないつす。自分の見た方がいいですよ」

「というか腕時計はめてる腕ぐらい覚えとけよ。」

「悪かったな、俺あんま時計見ねえんだよ」

俺の思ったことが顔にでも出てしまったか、先輩が不貞腐れてしまった。先輩が唇を失らせて腕を確認しているの、俺も残りの腕を確かめてやる。右半身の真ん中の腕に、そいつは光っていた。

「あれ？先輩」

「なんだ、あつたか？」

「あることにはありましたけど、お釈迦ですね」

短針も長針も、果ては秒針まで御陀仏。ほら、と文字盤を先輩に向けてやると、別の腕がわなわなと蠢いた。なんだその動き。

「マジかあ。これって上に言えば変えてもらえんの？」

「どうなんですかね。言ってみたらいいんじゃないすか」

落胆する先輩のすぐ側で、腕が別の生き物のように動いていた。関節が軋むのも構わずに、うじゃうじゃ絡む。

俺の視線に気づいた先輩が自分の腕を見つめて、それからへらりと笑った。

「な？ 調子悪いだろ。最近よくこうなる」

「腕ぶった切ったらどうですか」

「馬鹿、おまえ」

ぐ、と俺の腕に痛みが走って、思わず先輩の腕を跳ね退けた。腕時計ごと力の限り握り込まれたようで、ガラスにややヒビが入っている。悪い、と謝る先輩から悪意は感じられない。腕が、自らの意志で行ったのだろう。おそらく俺の発言に怒りを覚えて。

「……これじゃ切れないですね」

「だろ。とんだじゃじゃ馬抱えちまったよ」

脳味噌がぼやけたようにうまく働かない。持ち場のベルトコンベアがやかましく流れていく。ガタガタ手を伸ばしてガタガタ赤と青のコードを繋げてガタガタ導線をガタガタガタガタ。煩い、煩いうるさいああやかましい。

昨日まで隣にいたはずの同期の場所が、今日はぼっかり抜け殻になっている。辺りにも間引きのごとくまばらな間隔が空いていた。どろりて今日は仕事が多いわけだ。調子が悪い時にこの仕事量はたまったものではない。指

がもつれないように、何億と繰り返した動きをもう一回。

視界で一番遠くのラインでは、オノダが涼しい顔をして手を動かしている。目が霞むから本当にオノダか自信はないけれど。きつちりと等間隔に並べられたうちの一人になってしまうと、オノダという名前のラベルなんて最早意味をなさない。隣も一番端も同機種ならば、オノダとその他の違いなんて見つけられない。

少しの間動作を止めていたら、あつという間に流れが淀んでいた。慌てて下を向くと、溜まった色が俺を睨んでいる。赤と青のコードを、どうするんだったか。こめかみの辺りが鋭く痛む。この導線、どこに繋がればいいんだ。視界が霞んでぶれる。指の動かし方は、どうすれば。機械の音が杭のごとく脳味噌を貫く。呼吸は。重低音が鈍器に代わって殴る殴る殴る。

休憩まであと何分なのか。縮る思いで腕時計を確認すると、俺より先に息の根が止まっていた。午前なのか午後なのか、いずれにせよはるか遠い時刻を指している。役に立たない傷ついた文字盤はしんと静まり返っていた。あえぐように息をしゃくって顔を上げる。壁のどこかに時計が掛けてあったはずなのだ。左、右、どこだ。またさらな壁が俺を嘲笑う。脳に響くのは機械音か、それとも俺の頭痛か。見つかからない時計に苛立って後ろを振り返る、と。

蜘蛛もどきが一体たりともいなかった。

視界が歪んで、真っ暗になって、足から力が抜ける。ライン作業を強制停止するブザー音が、ぶつんと切れた。

廃棄処理場がせわしなく働いている。

「社長、また一体倒れました」

秘書が書類を捲りながら淡々と報告を行う。

「またか。今月何体目だ」

呆れた素振りのため息をつく社長の視界では、また一体焼却炉に投げ込まれていた。傷がついた腕時計と死んだ魚の眼が、揺らぐ光に照らされて消える。

「やはり新型を買って正解だったな。こう何体もお釈迦になってはかなわん」

うんうんとひとり頷いて、社長が自分の腕に視線を落とす。片眉上げて口端を歪めた。

「なんだ、もう十二時十分ではないか。昼を食わねば」

「かしこまりました。用意をさせます」

秘書がちらりと自分の時計を確認する。

そこでは、長針が短針を追いかけていた。